

都合のいい二人

とんだお人好し

1

「あつあつ、んっ、はあつ、あつ」

ベッドの軋む音と喘ぎ声が、ろくに思考が出来ない脳内に響く。
俺は一体こんな所で…何を…



五月。ゴールデンウィークが開け、今週からまた授業が始まった。

大学に入学して早一ヶ月。口下手で人見知りな俺は、未だ新しい環境や大学で知り合った人とも慣れずにいたが、ただ一人、俺と気さくに会話してくれる人がいた。

「泉くん、ゴールデンウィークはどこか行つた？」

川崎遥ちゃん。二浪した俺より二つ年下の女の子。予備校時代の知り合いだ。

「特にどこにも行つてないよ。ずっと課題やつてた」

「そうなんだ。期限はまだ先なのに、しつかりしてるね」

つまらない俺の話にも笑顔で受け答えてくれる優しい女の子。予備校の時はそこま
で交流はなかったものの、同じ大学に入学した事がきっかけでよく話すようになった
ことで、俺は密かに彼女へ想いを馳せていた。

偶然にも彼女と履修が幾つか被つており、こうやつて授業が始まるまでの間、隣の
席同士で雑談をしている。親しくしてくれる人がいるおかげで、不安でいっぱいだった
大学生活を楽しく有意義に過ごすことができそうだ。

「でもせつかくの連休だったのに、どこにも行つてないのは勿体無いね…。そうだ！
夏休み、一緒に海行こうよ」

「えっ、海…!?!」

「うん海。いやかな?」

「いや、そんなことないけど…!」

「じゃあ決まりね!」

女の子と海に行くなんて初めてだ。夏休みまでまだ期間があるのに、もうすでに緊張
してきた…。

授業開始まで後一分。その時教室に入つて来た、黒いコートを着た背の低い男が、

俺の席の前を通り過ぎた。こんな暑い時期にコート…？　そう思いながら横目に追いやると、男がコートのポケットから手を出した瞬間、中から何かが落ちるのが見えた。男はそれに気付いておらず、そのまま席に着いた。何を落としたのか見てみると、一枚の万札だった。紙幣を落としたのに気付かないなんて、誰かに盗られたりしたらどうするんだ。

「あの、落としましたよ。これ」

俺は一万円札を拾い、その男の席まで届けに行つた。すると男は座つたまま万札を受け取り、

「ありがとう」

と一言だけ呟き、微笑を浮かべた。女の子みtainな顔立ちをした、赤い唇が印象的な男だった。

そう、女の子みtainな顔。見た瞬間、何故かデジャヴを感じた。この顔、どこかで見たことがある。

前に会つたことがあつたか？　それとも、授業が一緒だから見覚えがあつただけ？　そんな事を考えていたら授業開始のチャイムが鳴り響き、俺は慌てて席に戻つた。そして席に着いた瞬間、先程のデジャヴの原因が発覚する。

あの男、遙ちゃんに似ているんだ。

◆

「じゃあまた明日ね」遙ちゃんが一足先に教室から出て行つた。

授業が終わり、昼休みに入った。昼飯は何にしようか考えていると、先程万札を届けてあげた男が、目の前に現れてこう言つた。

「さつきはお金拾つてくれてありがとう。お礼したいから、ご飯奢らせてよ」

「あつ、あ、ど、どうも……」

急に声を掛けられて吃る俺を背に、そのまま男が歩き出した。

「まつ待って……!」

急いで鞆を取り、男の後を追つた。

男の後を追つた先は大学内の学食ではなく、大学の近くの喫茶店。

「何で学食じゃなくてここなんですか？」

「学食は人がいっぱい騒がしいからあまり好きじゃないんだよね。このお店は結構静かで落ち着くの」

たしかに、昼時だというのにあまり客の姿はない。

：ついさつき会つたばかりの人と何を喋ればいいのかわからず、ついつい沈黙気味になつてしまい、非常に気まずい……。それにせつかくご馳走してくれているんだし、

せめて何か話題を振らなければ。

「えつと…、おいくつなんですか？」

「十八」

「えつ、という事は一年…!？」

知らなかった。まさか同じ学年だったとは。

「僕の事知らなかったんだ」

「あ、はい、すみません…」

知らないも何も、今日会ったのが初めてだし…。

「僕は知ってたよ。泉くんのこと」

「えつ？　なんで俺の名前…」

「背の高い人が隣に座ってるなって思ってた。気にしてたの、僕だけだったんだ」

「隣に…？　もしかして、入学式の時？」

「そう」

入学式では学籍番号順に席が用意されていた。学籍番号は学科ごとの学生の名前順。

「つまり、学科も一緒ってこと？」

「うん。僕のこと全然知らなかったんだね、同じ学年で学科も一緒なのに」

「あつ、ご、ごめんなさい…」

「別にいいけど。それより随分仲良いんだね」

「え？」

「川崎さんと」

「あつ、遙かちや…川崎さんは同じ予備校だった人で…」

「好きなの？」

「えっ!？」

凶星だった。彼女に想いを寄せていたことが、まさか話したこともなかった人にまで見透かされていたとは。

「えっと別に彼女のことはそういうのではなくて、普通の友達で…！」

「ふーん」

「…」

自分から振っておいて薄い反応をかます男。いじるわけでもなく、自分も遙ちゃんが好きだから身を引けと脅すわけでもなく…何故こんな事を聞いたんだ？

「僕とも」

「えっ？」

「僕とも友達になつてよ」

耳を伺った。何故？ どうしてわざわざ俺みたいなやつと友達に？

「僕、まだ誰とも馴染めてなくて」

「お、俺でよければ、別に…良いけど…」

「ほんと？　ありがとう」

万札を届けてあげた時に見せたのと同じ笑顔。思わず脳裏に遙ちゃんがよぎる。性別は違うのに、そしておそらく親族でもないはずなのに、どこか二人は似ている。

「泉くんって、下の名前何だっけ？」

「えっと、浩樹こうきだけど…。あ、そういえば…名前は？」

「雨宮。雨宮悠あみやゆう」



次の週の火曜日。いつも通り二限の授業を遙ちゃんと同じ席で受ける。授業が始まるまでの間、遙ちゃんと何気ない会話をしていた。すると授業開始五分前、雨宮悠が教室に入って来るなり、俺の方へとやってきた。

「おはよう。隣いい？」

俺の返事を待たずに右隣へ座る雨宮。教室にある横長の机は、一つで三人まで座れるようになっている。

「お、おはよう…。今日は早かったね」

「早いつて…授業始まる数分前じゃん」

「いや、先週はギリギリに来てた覚えがあるから…」

「遅刻寸前にしか来ないと思つてんだ」

「いや別にそういうわけでは……」

「泉くん、お友達？」二人で話していると、遙ちゃんも会話に加わった。

「あつ、遙ちゃん、紹介するよ。この人は雨宮悠、俺らと同学年で同じ学科だよ」

「えっ同じ科!? すみません知らなくて……」

「いいよ。よろしく遙ちゃん」

誰とでも仲良くできる遙ちゃんにすら認知されていなかったのか……。

「教科書」

「えっ?」

「持つてないから見せてくんない?」

「あつ、い、いいけど……忘れたの?」

「買ってない」

「え!? 教科書販売の日に来てなかったの?」

「休んでた」

なんだか適当なやつだな……。こんな調子でちゃんと単位取れるのか?

ふと左隣を見ると、遙ちゃんがこちらを向いていた。いや、正確に言うと、俺の右隣の雨宮を見つめていた。

「遙ちゃん、どうしたの?」

「えっいや…！ なんでも…！」

遙ちゃんが慌てた様子で前を向く。その瞬間、授業開始を告げるチャイムが鳴った。



授業終了と同時に、雨宮が俺に話しかけてきた。

「午後も授業？」

「あつああ、そうだけど…雨宮は？」

「用事あるから今日は帰る」

「サボっても平気なの？」

「大丈夫でしょ、ちよつとくらい」

「やっぱりどこか適当な奴だな…。そう思ったと同時に、あの事を思い出した。」

「あつ！ 待つて！」

雨宮の腕を咄嗟に掴む俺。そして遙ちゃんの目の前に身体を引き寄せた。

「前から思ってたんだ！ 君ら二人つて、顔似てるよね？」

改めて二人の顔を見比べてみると、やはり相当似ていると確信した。

「えっ、似てるって…!？」

動揺した様子の遙ちゃん。それとは対照的に無言の雨宮。

「遙ちゃんと雨宮って、顔似てると思うんだよ。二人とも親戚とかじゃないよね？」

「ちつ違うよ！」

「違うけど」

二人から同時に否定をくらう。

「…僕もう行くから」

雨宮がさつさと教室を後にした。急ぎの用事でもあるのか？顔は似ているけど、遙ちゃんとは態度が全然違うな。

そう思いながら遙ちゃんの方を見ると、顔を赤くした遙ちゃんの姿があった。

昼休みの時間を利用して、近くのコンビニで昼食を買うついでに公共料金の支払いを済ませようと思い、大学の校門付近まで来たその時。見覚えのある人物を見かけた。

雨宮だ。…誰かと一緒にいる？

雨宮の隣には、明らかに学校の生徒ではないスーツ姿の男性がいた。おそらく四、五十代くらいの中年男性だ。なんであんな人と一緒に…？親か？はたまた親戚？そう思った瞬間、その男性は雨宮の腰へ手を回した。それに対し、少し怪訝な表情を浮かべる雨宮。

どうも様子がおかしい。親や親戚があんなスキンシップをするだろうか？ただの知り合い？それとも…ナンパか何かか？

ありえなくはない。雨宮は、俺でさえも一目見ただけで女の子の友達を連想してしまふくらいには女性らしい顔つきをしている。そしてあの体格、格好。少しばかり地味な見た目をした女子と思われても何ら不思議ではない。

様子を遠目に見ていると、雨宮は男と共に黒い乗用車の方へ向かつて歩いていった。
：なんだ？ この胸のざわめきは。何か引つかかる。何故か気になって仕方が無い。
先週会ったばかりの、人となりはまだよく知らない一人の同級生のことが。

「あの」

「はい？」

「俺の友人に何か用ですか？」

「…？」

考えるよりも先に体が動き、俺は雨宮を連れだした男に話しかけていた。

「ほら雨宮、行くぞ」

「ちよつと何」

「いいから早く！」

雨宮の手を引き、男から連れ去るようにして走り出した。必死に走ったが、どうも男が追いかけて来る様子はない。どうやらナンパ師から雨宮を救い出せたようだ。

「ちよつと、ちよつと！ 泉くん！」

気が付くと、学校から少し離れた市街地の方まで来ていた。

「手離して。痛いんだけど」

「ああつごめん……！」

無意識に手を握っていたことに気が付き、咄嗟に手を振り解いた。

「なんでこんな事したの？」

「何でつて……いや……、お前が連れ去られそうになつてたから……」

「誰に」

「誰につて、あのナンパしてきたおっさんだよ！」

「ナンパ？」

「ナンパだつて事にも気付いてなかつたのか……。いくら顔が女の子みたいだからつて、間違われてナンパされるのも気の毒だけど、気が付かないのも……」

「いや何言つてんの。ナンパじゃないつて」

「え……、知り合ひ？」

「うん」

「……でも知り合ひだからつて、腰に手回したりなんかして……、絶対下心あつたら……」

「そりやあるだろうねえ。あの人、僕のお客さんだから」

「お客さん……？ えつと、バイト先かなんかの？」

「僕バイトしてないけど」

「え……？」

「わかんない？ 援交だよ」

「……援交？」

「それって……援助交際のこと？」

「うん」

「えっ……男なのに男相手に援交……!? 援交ってことはつまりその……あの……」

「そ。身体売ってんの。僕」

頭が真っ白になった。こんな身近に大人に身体を売っている人がいたとは……しかも男で……。しばらく理解が追いつかないでいると、雨宮が口を開く。

「あーあ。おじさん怒ってるだろうなあ」

「え？」

「急にいなくなつたのに連絡もしてこないし。もう会ってくれなくなつたらどうしようかなあ。誰のせいかな……」

「い、いやだつて俺はお前がナンパされてると思つたから……」

「ただの勘違いで助けようとしてくれたんだ。とんだお人好しだね」

「勘違いは……まあ俺が悪いけど……、てか売りなんてやめろよ。危ねえよ」

「危ないってなにが？」

「いや、だからその……ダメだろ……売春なんて」

「君に關係無いし。なんでこんな余計な事したわけ？」

「…そりゃあ、友達だからだよ。友達助けるのに余計もクソもねえよ」

「…!!」

雨宮が目を丸くした。何を思ったのかは知らないが、すぐに表情を元に戻した。

「いやでも勘違いは勘違いだし。迷惑かけたわけだから。責任取ってよ」

「え？」

「僕んち来てよ、今から。迷惑かけたんだからそれくらいするよね？」

「えっちよつと…」

今度は、俺が雨宮に手を引かれて連れられた。

着いた場所は、学校から徒歩数分程度の小さなアパート。

「上がって」

雨宮が玄関のドアを開けた瞬間目に入ってきたのは、捨てっぱなしのゴミや、おそろく脱ぎ捨てられたままであろう積まれた衣類。物が散乱しており、床にはろくに足の踏み場もない。

言葉を見失っていると、カバンを置き、コートを脱いだ雨宮がこう言った。

「おじさんの代わりに泉くんが相手してくれるでしょ？」

「あ、相手って？」

「決まってるじゃない」

そう言つてベッドの上に俺を押し倒した。

「セックスだよ」

「…は？」

耳を疑つた。またもや思考が停止する。

「男とは当然初めてでしょ？」

「いや、初めても何も…出来ねえだろ…！ 男同士では…！」

「はは、やり方も知らないんだ」

服を脱ぎ始める雨宮。肌は白く、骨の浮いた細身の身体が目飛び込んできた。

それと同時に…白くて細い左の二の腕に、無数の切り傷があるのに気が付いた。

「え…？」

この状況全てに混乱を隠しきれない。

裸の男、腕の傷、男とセックスをしようとしているこの状況。思考がまとまらず、

言葉も上手く出てこない。そんな混乱した思考を遮つてくるように、雨宮の声が耳に

入ってきた。

「じゃあ君は何もしなくていいよ。僕が全部やつてあげるから。責任取る側なのに、

ラクでいいね」

「えっちよっ！ 待つて!!」

雨宮が俺のズボンのチャックを下ろし始めた。俺は必死で抵抗する。

「なんで嫌がるわけ？ 君言つてたじゃん。遙ちゃん顔似てるって。僕を遙ちゃんだと思つてセックスすればいいんじゃない？」

「はっ…!? バカ！ お前なあ！」

「ていうか、君が勝手な勘違いで妨害してきたんだよね？ 拒む権利ないでしょ」

「それはそうだけど…」

「だつたらじつとしててよ」

「か…？」

「結構大きいんだね」

雨宮はそう言つて舌を這わせた。

「…っ！」

丁寧、優しく、味わうようにして舐め続ける雨宮。

「はは、大きくなつてきた。勃つの早いんだね」

今起こっている現実には戸惑うばかりの俺。男なのに…男のモノを舐められるのか？ そうすると、今度は口に啞えて頭を上下し始めた。

「あっ…雨宮…」

快楽と混乱で思考がままならない。初めての感覚にただ身を委ねるしかなかったが、

すぐに雨宮は啞えるのをやめた。

「出したいだろうけど我慢して。はい、ゴムくらいは自分で着けてくれない？」
そう言つて差し出したのは小さな袋。

「…これつて…」

どこかで見たことはあつても、使う機会は無かつたその袋。ただ呆然としてみると、
「…もしかして着け方わかんない？」と雨宮に尋ねられた。

「……………」無言で頷く。

「え、今までゴム無しで女子とやつてたの？」

「やつてたつて…？」

「だからセックス」

「……………」したくない」

「え？」驚いた様子の雨宮。

「てことは…童貞？」

「…」

何を言わずとも察したようだ。雨宮は大笑いし始めた。

「うつそ童貞!? まじ!? ははは！ ウケる、初めての相手が男とか…あはは…！」
返す言葉もない。俺は今まで女の子と付き合つたことがなく、もちろん性行為にも
全く縁が無かつた。

「さつさと童貞なんか捨てちゃおう。まあ、相手は女子じゃなくて男なんだけど…」
そう言つて袋を開けて中身を取り出し、透明の薄いゴムを慣れた手つきで俺の性器に装着させた。

「早速挿れるよ。大丈夫、帰る前にトイレで綺麗にしたから」

「えつちよつと…挿れるつて…どこに…？」

「決まってるじゃん。ここ」

そう言つて、恥ずかしげもなく肛門を広げて見せる雨宮に驚愕した。

「えっ…！ 無理だつて！ 入んねえよ、そんなところに！」

「そうだね。結構大きいから、入んないかも…」

雨宮はそう言つて、横たわった俺の上にまたがる。そしてゆっくり腰を落とし、俺の性器を肛門へと挿入した。

「ん…、すつごい大きい…。あつ…ほら…、入ったよ…」

上下に腰を揺らす雨宮。初めてのセックスは、未経験の快感を引き起こした。

「あつ…ヤバイつて…雨宮…」

快楽で言葉が上手く発せられない。話すどころではない、思考どころではない。全神経が下半身に集中し、熱が上がる。

「ん…つ、中…奥まで当たつてる…つ。あつあつ、んっ、はあつ、あつ」

ベッドの軋む音と喘ぎ声が、ろくに思考が出来ない脳内に響く。

俺は一体こんな所で…何を…

思わず顔を腕で隠す俺。それを見かねて、雨宮が無理矢理俺の腕をどかした。
「顔隠さないで」

腕を押さえたまま、動けない俺に強引に口付けをした。

「…!!」

口の中に舌を入れてきたのがわかった。舌と舌を絡める音が耳にまとわりつく。

次の瞬間、快楽が絶頂に達する。同時に雨宮の動きも止まった。結合部を見る雨宮。
「ゴムずれちゃった…」そう言つてゴムを取り出す。

「あ、もう出ちゃつてたんだ。はは」

手に持ったゴムの中には、白濁液が溜まっていた。

「嬉しいなあ。泉くんの初めてが僕だなんて」

やつとの思いで我に帰つたと同時に、恥ずかしさが込み上げてきた。俺は雨宮を押し
しのけ、急いで服を着直し、カバンを手にした。

「あつ、ちよつと。もう行つちやうの？」

雨宮の問いに返事もせず、一刻も早くその場から去りたい一心でアパートを出た。

「…僕まだイってないんだけど」

全速力で学校まで戻つた。学校に戻るや否や、真っ先に向かうは男子トイレ。

先程の興奮が蘇る。息が荒くなり動悸が止まらない。雨宮の中で出した筈なのに、まだおさまらない。まだ出したい。

「くそっ…、くそっ…！」

トイレの個室で一人、自分のモノを掴み、手を上下に動かす。先程の光景が頭に浮かぶ。腰を振る雨宮。初経験の快楽。そして口付け。

一時間弱のうちで我が身に起こった出来事があまりにも現実離れし過ぎていて、今はとにかく、ただとにかく全て吐き出さなければ気が収まらなかった。

「はっはあつ、泉くんっ、ああっ！」

同時刻。雨宮は先程の使用済みコンドームを己の性器に被せ、一心不乱に手を動かしていた。

「はあっはあつ、泉くん、いずみくん、はあ、はあっ」

泉を相手にしていた先程の余裕な態度とは打って変わって、只々快楽を貪る雨宮。よだれを垂らし、崩れた表情で絶頂を迎える。

「はあ、はあ…泉くん…」

泉のものと自分のものが混ざり合ったコンドームの中身を手のひらに出し、肛門へ塗り込み、指を出し入れする。

「あつ、あんっ、またイク、あつ、いずみくん、はあっ」

身体を震わせる雨宮。疲れ果て、そのままベッドへ寝転ぶ。

「可愛かったなあ。まさか童貞だったなんて。はは……ますます好きになっちゃった」

「……」

俺は誰にも聞かれぬよう、声を上げず静かに射精した。洋式便器の蓋に掛かってしまった精液を、トイレトペーパーで拭き取った。

……あいつに今後、どんな顔をして会えばいい？ あいつの目的は一体何だったんだ？ 援交の邪魔をされて、とにかく誰でもいいからセックスがしたかっただけなのか？ でもそれなら、あのお客さんとやらにあの時すぐ連絡すればよかったはずだ。何故それをせずに俺に責任を取るようけしかけた？ ムカついたから？ からかいたかったから？ それとも……。

2

「へえ、そういう事だったんだ」

「そう、友達なの、はっ、はあっ、ごめんね、お、怒ってた？」

ラブホテルの浴室内で、話し声と喘ぎ声と、水の音が響き渡る。

「怒ってないよ。ねえ、その友達にも手を出したの？」

「出していないっ、あつ、あつ、遠藤さんだけ、遠藤さんだけだよ、あつ、あんっ」
援交相手の男に対して、息をするように嘘をつく雨宮。
「あつ、あつ、好き、遠藤さん、好きです。キスして」



火曜日の朝。いつものように遙ちゃんが俺に話しかけてきた。

「泉くんおはよう。レポート提出って今日だったよね？」

「ん、あ、ああ…」

「どうしたの？ まさか忘れてたとか？」

「いや、ちゃんとやってきたよ…」

先週のことから離れず、気付くと放心してしまっている。それに、今日は火曜日。もしかしたらあいつと顔を合わせてしまうかもしれない。そう思うと気が気じゃなく、どうにも落ち着かなかつた。

授業開始一分前、雨宮が教室に入ってきた。そして俺の方へと近づいて来たが…

「隣いい？」

そう話しかけたのは俺ではなく遙ちゃん。というのも、今日俺が座っている席は右

端。遙ちゃんは真ん中の席に座り、必然的に遙ちゃんの左隣しか席が空いていなかったからだ。

「あ、雨宮くん、おはよう…！ どうぞ！」

遙ちゃんの返事を待ち、着席する雨宮。

「泉くん、おはよ」

雨宮に急に話しかけられ、動揺する。

「おつ、おはよう…」

…普段どおりだ。特に先週の事を意識している様子は伺えない。

「そういえば雨宮くん…、教科書持ってなかったよね？」

「ああ、うん」

「私のでよければ…一緒に見ようよ」

「ありがとう」

「ね、ねえ雨宮くん。レポートやって来た？」

「一応」

こんな適当なやつでもさすがに提出物はちゃんとやるんだな…。

「雨宮くんって何歳？」

「今年で十九」

「あつそうなんだ！ じゃあ私と同一年だね！」

「ふーん」

「ねえねえこの授業つてさ、このレポートと、あと期末レポートと：」

気を遣って話題を振り続ける遙ちゃん、頬杖をつきながら適当に受け答えする雨宮。一見仲が良さそうには見えないが……。それでも、遙ちゃんの横顔がどこか楽しそう、緊張しているような、そういつた様子が伺えた。

胸がざわつく。何故か嫌な予感がする。何故だ。：別に二人が仲良くなろうと、二人の勝手じゃないか：。



授業が終わったと同時に、また遙ちゃんが雨宮に話しかけに行く。それを適当に受け流して帰ろうとする雨宮。またどうせ援交相手にでも会いに行くつもりだろう：。

そう思っている、二人はスマートフォンを取り出した。なんと、お互いの連絡先を交換し始めたのだ。そんな：俺なんて未だに遙ちゃんに連絡先を聞いていないのに。まさかあいつに先を越されるなんて……。しかも遙ちゃんの方から聞いてくるなんて：。
「あ、泉くんもまだだったよね？　よかつたら交換しようよ！」

「あつああ：、いいよ」

断る理由は無。だが、雨宮の連絡先を聞いたついでに、俺にも気を遣うように連

絡先を聞いてきた遙ちゃんの対応に少しだけ落ち込んだ。それでも、今まで聞き出せなかった遙ちゃんの連絡先をようやく手に入れた。それは純粹に嬉しかった。

だが、喜びも束の間…。

「泉くん。僕も」

……

「…いいよ」

当然、流れるにはこうなるだろう…と思つてはいたが、こいつとの場合、とにかく嫌な予感しかなかった。何か面倒な事が起きそうな、そんな予感。

「ありがとう」

交換を終えた雨宮は、コートの中にスマホをしまった。

「何かあつたら連絡していいよね？」

「お、おう…」

雨宮がクスリと笑う。

「またね」

雨宮が教室から出て行つたのを確認し、遙ちゃんに問いかける。

「どうして雨宮の連絡先聞いたの？」

「え、どうしてつて…、ただ単にもつと仲良くなりたくて…。まずかつたかな？」

「いや、まずいとかじゃないけど…」

単に仲良く？ あんなお世辞にも愛想が良いとは言えないようなやつと？

：俺があいつの本性を知ってしまったからなのか。あいつへの見る目が一変し、あいつの行動一つ一つが、何か企みがあるのではないかと勘ぐってしまう。そしてその勘ぐりが、嫌な予感へと変わる。遙ちゃんが関わってくるとなると尚更だ。

「：まあ、あいつはあんな感じで無愛想なやつだけど、遙ちゃんが気に掛けてくれたらきつと嬉しいと思う。仲良くなれるといいね」

遙ちゃんに嫌われたくない一心で、心にも無いことを口走ってしまった。

「ほんとに？ そうかなあ…」

まんざらでもなさそうな様子の遙ちゃん。それとは裏腹に、俺は非常に複雑な心境だ。本当はそうじゃないのに。遙ちゃんが俺とだけ仲良くしてくれれば、ただそれだけでもいいのに。



次の日、水曜日の朝。授業を行う教室まで向かう途中で遙ちゃんを見かけた。

遙ちゃんと連絡先を交換したはいいものの、どういった文を送ればいいのかわからず、結局何のやりとりも出来なかった。今日は授業は一緒ではないが、挨拶だけでもしておこう。

「おはよう遙ちゃん」

「あつ、おはよう泉くん」

挨拶を交わす遙ちゃんの陰にいたのは、雨宮だった。

「おはよう。泉くん」

「…え？」

なんで？ どうして雨宮と一緒にいるんだ？

「ど、どうして二人一緒に…」

「授業一緒だったんだよ。昨日メッセージで聞いたの。そしたら案外同じ授業取ったから、一緒に受けようって言ったの」

昨日？ メッセージ？ 俺の知らないところでそんなやりとりを…

「じゃあね泉くん」

「あつ、ちよつと…」

戸惑う俺を後にし、二人は教室に入っただけだった。

二人で一緒に…？ 雨宮は了承しているのか？ 授業をサボり気味な上に、遙ちゃんにはさほど興味無さそうなあいつが。

…絶対そんな気は無いはずなのだ。なんせあいつは男同士でやるのが好きなやつ。男が好きなはずなんだ。…そう…男が…

「……………」

その日は気が気じゃなく、ずつと上の空だった。



木曜日。俺は授業を休んだ。

どうしても大学に行く気になれず、ベッドの上で寝て過ごした。気が付けば深夜。今日一日何も食べていないことに気が付く。かなり遅めだが晩飯を摂ろうと、最寄り駅の近くのコンビニまで向かった。…それがいけなかった。

駅の前を通り過ぎようとしたその時、深夜で電車もない時間帯に、地べたでうずくまっている人の影が見えた。

見覚えのある黒いコート…。

「えっ雨宮…?」

俺の声に反応し、顔を上げる。確かに雨宮だ。

「泉くん?」

「何してんだよ…こんな所で…」

「電車…なくなっちゃって…もう帰るのしんどい…」

いつになく弱々しい雨宮。体調を崩したのかと思い、とつさに身体を支えた。

「大丈夫か？ 気分悪いのか？」

すると、雨宮からある匂いが漂って来た。酒の匂いだ。

「お前…酒くさ…っ」

「へへ、飲みすぎた」

心配した俺が馬鹿だった。ただ酔いつぶれてただけかよ…。しかもこいつ、未成年のくせに飲酒なんかしやがって。

「泊めてよ」

「は？」

「お願い、泉くんち泊めて。お願い」

「…」

相手が相手なので断りたいところだったが、困っている人を見捨てることができなかつた。フラフラで歩くのもままならない雨宮を支えながら帰路を歩いた。

「誰と飲んでたんだ？」

「おじさん…」

あの例のおっさんか。ていうか結局普通に会ってんじゃねえか。責任取れとか言つてたのはなんだつたんだよ…。

家に着き、雨宮を部屋へ上げる。

「お風呂借りていい？ 酔いが少しは冷めるかも」

「良いけど…風呂場で寝るなよ」

雨宮が風呂に入っている間、本当にあいつを家へ上げてでも良かったのか考えた。

きつとまた何かしでかすに違いない。雨宮への疑念は晴れないが、それでも見捨てることができなかつた俺は、相当なお人好しなんだろうと改めて実感する。

…それにしても、雨宮の入浴があまりにも長い。時計の針は深夜一時を回っていた。しばらくして、浴室の戸を開ける音が聞こえてきた。やっと上がったか、と思つたのも束の間。思わず目を伺つた。

身体を拭いたタオルと服を手に持ち、全裸のままの雨宮が俺のベッドへ倒れ込んだ。

「おい、服着ろよ！ 髪もちゃんと乾いてないし！ 聞いているのか？」

そのまま眠りについてしまつたようだ。仕方無く放つておいて、自分も風呂に入る事にした。

自分が風呂から上がつても、服を着ずに全裸のまままで寝ている雨宮の姿があつた。

「おい、いい加減にしろよ。てか一人でベッド占領すんじゃねえ。俺の寝る場所が無いだろ」

とは言うものの、一日中寝ていたのであまり眠くはなかつたのだが…。無理矢理起

こそうとしたその時、突然雨宮が俺の手を引き、ベッドへ引きずり込んだ。

「おい！ お前起きてるんだつたら返事くらい…」

「泉くん」

「あ？」

「セックスしよ」

「…は？」

何も言わせぬまま俺の服を脱がせ、フェラチオを行う雨宮。

「ちよつと待て！ お前さつきまで援交相手に会ってたんじゃねえのかよ!？」

「まだやりたい。大丈夫、さつき中で出されたもの全部綺麗にしたから」

「そういう問題じゃねえ…」

顔がまだ赤い。まだ酔いは冷めきつていないようだ。

「お前なあ…マジで、はあ、いい加減にしろよ…!」

「いいじゃん、タダで気持ちよくなれるんだよ。セックス好きじゃないの？ 本当は

中に挿れて、んっ、中出したいんでしょ？ 気持ちよくなりたいんじゃないの？」

俺の性器をしゃぶりながら話す雨宮。

嫌なのに、屈辱なのに、好きじゃないのに。俺は何故拒まない？ 何故抵抗できない？

い？

「ね、今度は泉くんが動いて。泉くんの好きなように。貪って。思い切り。犯して」

そう言つて仰向けの状態で尻を向ける。いても立つてもいられなくなり、本能の赴くまま雨宮に挿入し、勢いよく腰を動かした。

「あつすごつ、すごいつ、は、激し…っ！ あつ、泉くん、泉くん、うあつ、あつ」
顔がはつきり見える状態でのセックス。やはり思い浮かぶのは、遙ちゃんの顔だった。こんな事をしている時にあの子の事を思い出したくなかった。ましてやあの子とこいつを照らし合わせるなんて…

「…今遙ちゃんのこと考えてたでしょ」

「…えっ!? いついや、えつと…その…」

「あ、マジなんだ。カマかけだつたんだけど」

「お…お前なあ…」

まるで心を見透かされたようで、ひどく動揺した。

「本当に好きなんだね」

「うるせえよ」

「やっぱり似てる？」

「は？」

「僕と遙ちゃん」

「…確かに見た目は似てるけどな…。中身は全然似てない。お前みたいに自分勝手な性格してないし、お前みたいな淫乱じゃない。全然似てねえよ、お前と遙ちゃんは！」

「一緒にしてんじやねえよ！」

「一緒にしてるのはそっちでしょ」

「はあ？」

「本当は遙ちゃんとセックスしたいって思ってるんでしょ？」

「…！」

「遙ちゃんにちんこぶち込んで、中で出して孕ませたいって思ってるんじゃないの？
それが出来ないから、仕方無く顔が似てる僕で欲を晴らしてるんだよ」

「そんなんじやねえよ…」

「僕の事は雑に扱ってても、遙ちゃんの事は大切にしたいと思ってるんだね」

「当たり前だろ…。遙ちゃんは、唯一俺に優しくしてくれた人だし。授業の時だけでも一緒にいてくれるだけでありがたいって思ってる。でも、俺だけに優しいわけじゃない。俺以外にも仲の良い人はたくさんいるし、お前みたいなやつにも平等に接してくれてる」

「ふふ、平等ね」

面白おかしく雨宮が笑う。

「何がおかしいんだよ」

「付き合うことになったんだよ」

「…え？」

「僕と遙ちゃん」

3

「嘘だ。なんで、お前なんかと」

あまりにも突拍子のない雨宮の発言。そう簡単には受け入れられない。

「嘘じゃないよ。一目見た時から僕の事好きだったんだって」

「：またからかかってるんだろ、胸糞悪い嘘はやめろ」

「だから嘘じゃないって。：ねえ、遙ちゃんさ、処女だったよ」

「は？」

「初めてだったんだって」

「初めてって…」

「僕が遙ちゃんの処女もらっちゃった。つい昨日」

そう言つて雨宮は自身のスマホを取り出した。そこに映っていたのは…

「あっ、あん、あ、あまみやくん、あっ」

目隠しをされ、手を縛られ、裸で横たわる遙ちゃんの動画だった。

「お前…っ、なんだよ、これ…!」

「泉くんに見せようと思つて。遙ちゃんのハメ撮り。喜ぶかと思つて」

「喜ぶわけねえだろ! お前…、こんな事してただで済むと思つてんのかよ!」

「なんで? 興奮しない? 好きな子の裸見れるんだよ。見たくないの?」

友達の女子が裸の状態を手を縛られ、カメラで撮られているこの状況が異常なのは明らかだ。なのに目の前のこいつは、さも当然かのように、悪びれもせず画面を見せつけてくる。

「動画消せ」

「なんで?」

「なんでじゃねえだろ…? ふざけるのもいい加減にしろよ!」

「だって、別にネットにアップしたりするわけじゃないんだよ? 泉くんに見せようと思つただけ。遙ちゃんにも撮つてゐることはバレてないしね」

「いいから消せ! こんな事されてるつて知つたら遙ちゃんがどう思うか考えろ!」

「…: 偽善者」

「はあ?」

「お人好しの偽善者。本当は見たいくせに。どうせ君は遙ちゃんと付き合えないし、セックスだつて出来やしない。だつて遙ちゃんは僕が好きなんだから」

「い、今関係ないだろそんな事は…」

「いいよ。僕を遙ちゃんだと思ってくれてても。遙ちゃんに見立ててセックスすればいい。僕は泉くんが好きなの。お願い、セックスするだけ。それだけでいいから」

「…俺はお前のことなんか大っ嫌いだ。ぶつ殺したいくらい」

「…本当はそんな怖いこと言う人だったんだ。困ってる人を見過ごせない、ただのお人好しだと思つてたけど」

「うるせえ」

そう言つて雨宮の身体を無理矢理後ろ向きにさせ、髪の毛を思い切り掴む。

「痛い、痛いよ泉くん」

「黙つて突かれてろ。言つたよな、お前。セックスするだけでいいって」

髪を掴んだ状態のまま、怒りをぶつけんばかりに腰を振る。

「あつあうつ、あつ、いずみくん、あつ、あんつ、中で、中で出して、いずみくん」

このどうしようもない怒りと性欲を、仕方無くこのクズで発散しようとして自分に言い聞かせながら、雨宮の中に射精した。

「はあ、はあ、泉くん…」

キスをしようとしてきた雨宮を押しつけ、雨宮の脱いだ服を投げつける。

「泉くん？」

「帰れ」

「え…」

「ここから学校まで一駅だけだから、歩きでも三十分あれば帰れるだろ」

「泊めてくれるんじゃないの？」

「うるせえ。とつとと帰れ。…顔見ると…、殺したくなる」

「…！」

「動画も消せよ」

雨宮が少しだけ泣いてたように見えたが、敢えて無視をした。

当然、遙ちゃんと付き合い始めたという事実もショックだが、あんな動画を撮った事への怒りの方が俺を蝕んだ。

あいつの目的は一体何だ？ 動画を撮った理由は？ 本当に俺を喜ばせたかっただけか？ ひいては遙ちゃんと付き合った理由は？ 俺を好きだとかなんとか言っておきながら。俺と遙ちゃん、両方好きって事なのか？

わからない。あいつの考えていることが。あいつという人間が。無論、あんな人間のことなど、わかりたくもない。



金曜日。

体調が悪い。結局あのはは一睡も出来なかった。授業中に寝てしまいそうだ…なんて事を考えながら廊下を歩いてる最中、またあの二人に出くわした。

「泉くん！ おはよう！」

「…おはよう」

「昨日どうしたの？ 授業出てないでしょ」

「えっと…風邪をひいてて」

「もう大丈夫なの？」

「うん」

「そっか、よかった」

どうしても昨日見た動画が頭をよぎり、遙ちゃんの顔をまともに見ることが出来ない。雨宮の顔に至っては見たくもなかった。

「今から一緒の授業だよ。一緒に受けよっか。三人で」

「え、三人？」

「雨宮くんも一緒なんだよ」

まさか金曜も授業が被っていたとは。先週もその前も会った覚えが無い。どんだけ授業サボってんだこいつ…。

遙ちゃんを真ん中にして座る。座るや否や、遙ちゃんが口を開いた。

「泉くん…実はね、私たち、付き合ってるんだ」

「…えっ、そうなの？」

当然知っていたが、敢えて知らなかったふりをする。

「泉くんが私と雨宮くんが似てるって言ってくれた時から、ちよつと意識してて…。」

「昨日から付き合うことになったの」

あの時か…。やはり俺がきつかけだつたようだ。

「…良いじゃん！ 二人ともお似合いだよ」

また心にも無いことを言ってしまった。遙ちゃんに嫌われたくない、ただそれだけの理由で。もう遙ちゃんは雨宮と付き合っているのに。

遙ちゃんと付き合っている当の本人は、ずっと下を向いてスマホを弄っている。相変わらず態度が悪いやつだな。

そう思った矢先、机の上に置いてあつた自分のスマホが鳴る。画面を見ると、雨宮からのメッセージが届いていた。こんな至近距離にいるのに何故…？ 不思議に思い開いてみると、一つの写真ファイルが添付されていた。

そこに映っていたのは、遙ちゃんのハメ撮り写真だつた。

「…………っ!!」

ひどく動揺した俺は、咄嗟にスマホをカバンの奥へ押し込んだ。…本人に見られてないよな…？ 遙ちゃんの様子を伺うが、気付いている様子はない。

その隣で、雨宮が手で口を覆いながらクスクス笑っていた。

◆

あいつが何をしたいのか俺にはわからない。わかりたくもないが、遙ちゃんに迷惑をかけるようなことだけはさせたくない。

直接本人を叱責しようと思いい立ち、その日の放課後、メッセージで空き教室に来るように連絡した。

「急に呼び出してどうしたの？」

「とぼけるな。言ったよな。遙ちゃんのデータは消せって」

「動画を消せとだけしか言ってなかったけど」

「屁理屈言うな！ 動画だけじゃない！ 写真も、隠し撮りしたやつ全部だ！」

「隠し撮りじゃなくてハメ撮りね」

口を開けば屁理屈ばかり。こいつ、自分が何をしでかしたのか分かってるのか？

「あと今日の授業前に送ってきた写真。あれどういことだよ」

「あれも喜ぶと思っただけだよ」

「だから喜ばねえって。違うだろ。本当はそういう意図じゃないだろ。俺をからかって、遙ちゃんとの仲を掻き乱して楽しんでるんだろ？」

「僕がちよつかい出ただけで掻き乱されるんだったら、最初から大した仲じゃなかったんじゃない？」

「…また屁理屈言いやがって。遙ちゃんと付き合った理由も何かあるんだろ。好きな子に見立てていいからセックスしてくれなんて言うほど俺に執着してるのに、どうして遙ちゃんと付き合う必要があるんだよ？」

「…」

「言えない理由なのか？」

「…してくれたら教えるよ」

兩宮はコートのボタンを外し、ジーンズのチャックを下ろした。

「お願い、犯して」

「お前なあ…、この期に及んでまだこんなことするのか？ しかもここ教室だぞ？ 何考えてんだよ！」

「泉くんに呼び出された時からずっと興奮が治らなくって…。お願い、挿れて。ぐちやぐちやに犯して。昨日みたいに乱暴してよ。そしたら理由も教える、遙ちゃんのデータも全部消す。約束する」

「…もうお前とはそういう事はしたくない。でもデータは全部消せ」

「やつてくれないと消さないから」

「…お前、脅してるともりか？」

「良いじゃん、セックスしてって言ってるだけだよ、簡単でしょ。それだけでデータ全部消せるんだよ。今後ハメ撮りも絶対しないから！」

「…そんな事言ったってなあ…、出来るわけないだろ、こんな所で…！ 誰かに見られたりしたらどうするんだよ!？」

「じゃ、じゃあキスして。お願い。キスだけなら良いでしょ？」

「う、それは…んぐっ!」

雨宮は俺を無理矢理壁へ押し付け、腕を強く押さえつけながら口付けをしてきた。

三秒、四秒、五秒…。いつもよりも長く、執拗にキスをする雨宮。何度も舌を出し入れし、口を離して息継ぎをしたかと思えば再度口付けをし、お互いの口の周りは唾液で塗れていた。

その時、ドアの開く音がした。そこには狼狽した表情の遙ちゃんが立っていた。

頭が真っ白になった。

遙ちゃんに見られてしまった。こいつとの関係。

「泉くん…雨宮くん…、何してるの…?」

「違う！ 遙ちゃん！ これはその…」

「私と雨宮くんが付き合ってるって話したよね？ 泉くん…」

「違うんだって！ 誤解！ 誤解だから！」

「こんな状況で…誤解も何もないでしょ…」雨宮が口を挟む。

「僕が好きなのは泉くんなの。遙ちゃんが告白してきたときは断ろうと思ったけど、それだと仲の良い泉くんとかくつつきかねないから。泉くんが遙ちゃんと付き合うなんて絶対許せない。泉くんは一生僕とだけセックスしてればいいの」

「お前何言ってる…、遙ちゃんごめん、今謝らせるから…」

「…私のこと騙して付き合ってたってこと？ 雨宮くん…」

「そうだよ」

「…っ！」遙ちゃんが泣き出す。そのまま走って教室を出て行ってしまった。

「遙ちゃん！」

「駄目、行かないで」雨宮が俺の服にしがみつく。

「離せ！ 大体お前が悪いんだよ！ 遙ちゃんに謝ってこい！」

「どうせまともに取り合ってくれないよ。こんなところ見られちゃったんだから。もちろん君も、もう相手にされないと思うよ。運が悪かったね。こんなタイミングで好きな子が現れるなんて。まあ、ここに来るように連絡したのは僕なんだけど」

「お前…、マジでふざけんなよ…」

「…目障りだった。あの女がずっと泉くんの横にいるから。他にもたくさん友達がいるのに、泉くんに思わせぶりの態度ばつかつて。その上僕にすつごいアプローチしてくるしさあ…。とんだクソビッチだよ。大つ嫌いだよ、あんな女」

聞くに耐えない侮辱の言葉を絶えず並べる雨宮。

頭に血が上った俺は、咄嗟に雨宮の頬を思い切り叩いてしまった。

「うっ…！」

雨宮が床に倒れ込む。頬が赤く腫れ上がり、鼻からは血が垂れていた。自分の手のひらもジンジンと痺れている。

相手に怪我をさせてしまった事と、思わず手が出てしまった事で頭が混乱し、掛ける言葉がすぐに浮かばずただ呆然と立ち尽くす。雨宮も、あまりの衝撃と痛みで放心している様子だった。本来ならすぐに謝るべき場面だろう。だがつい先程起こった出来事を考えると、素直に心配し、謝罪する事が出来なかった。

「…絶対に許さないからな。お前のこと」

雨宮を放置し、遙ちゃんの後を追いかけた。

「待って！ 遙ちゃん！」

俺の呼び掛けに反応し、立ち止まる遙ちゃん。振り返ったその顔は大量の涙で濡れていた。嗚咽が止まらない様子を見るに、とても話し合える状態ではない。

号泣している様を見て、取り返しをつかない事をしてしまったと痛感した。狼狽えて言葉に詰まっている俺から目を逸らし、遙ちゃんは早々に立ち去ってしまった。



終わった。なにもかも。

遙ちゃんに雨宮とキスしていると見られてしまった。遙ちゃんを傷つけてしまった。怒りに身を任せ、雨宮を本気で殴ってしまった。

築いた交友関係を一瞬のうちに失い、平穩に過ごせると思っていた大学生生活は、夏季休暇を待たぬまま崩れ去ってしまった。

気分が重い。吐き気がする。とても授業どころではない。今日は二人と会う火曜日。教室の前に来たところで足が動かなくなり、立ち往生する。：やはりダメだ。まともに授業を受けられる気がしない。踵を返したその時、遙ちゃんが女友達と楽しそうに話しながら向かってくるのが見えた。思わず立ち止まる。立ち止まるが…。

いつもは挨拶をしてくれた遙ちゃんだったが、俺の顔を見るなり笑顔が消え、目を逸らし、横を通り過ぎていった。

その瞬間、世界から取り糺された感覚に陥った。たった一人の友達に絶交されることがこんなにも辛いものだったなんて。

そう。たった一人だった。大学で俺と関わってくれた友達は、遙ちゃんただ一人。

泣きたいのを堪え、校門へと向かう。すると、校門の向こうから黒い影が向かってくるのが見えた。雨宮だった。…雨宮ともあんなことがあったんだ。もう流石に関わつてこないだろう。そのまま通り過ぎようとしたその時。

「あれ、帰るの」

雨宮が声を掛けてきた。

「単位平気なの？」

「…」

「まあ留年はしないように気をつけてよ」

雨宮はそう言つて、早々に俺の横を通り過ぎて行つた。

まだ関わつてくる。まだ話しかけてくる。何も残っていないこの俺に、唯一氣を掛けてくれた。自分に怪我を負わせた人間に対して、何故何事もなかったかのように接してくるんだ？

俺は振り返つて、雨宮を追いかけた。

「雨宮…」

歩みを止めて、こちらを振り返る雨宮。

「…どした？ 泉くん」

雨宮の頬には、小さな傷跡が付いていた。一度叩いだけで傷を負わせてしまうなんて。罪悪感が俺を苛む。

「あのさ、お前…、あの時のこと、忘れたわけじゃないよな？」

「…あの時のこと？」

「…お前のこと、思いつきり殴っただろ。怪我させたのに…気にしてないのか？」

「…気にしてるっていうか、まあ、すごい痛かったし、ちよつと怖かったかな」

「…それだけ？ そんなことされたら普通嫌いにならないか？ なんでまだ関わってくるんだよ？」

「嫌いにならないよ。僕泉くんのこと好きだもん。泉くんも、僕のこと友達だつて言ってくれてたじゃん」

「……」

特に気にしている素振りを見せない雨宮に、思わず言葉が詰まる。俺が気にしすぎてるだけなのか…？

「泉くんは僕のこと好き？」

「……！」

「…嫌い？」

…何も答えることが出来ない。こいつが一体何を考えているのかが全くわからず、

自分の思考もまとまらなくなってくる。

好きかと問われて、肯定も否定も出来なかった。こいつは遙ちゃんを騙し、裏切り、傷つけ、俺と遙ちゃんの仲を掻き乱した張本人だ。自分勝手に人の気持ちを考えてない、はつきり言つて最低な人間だと思う。なのにどこか無邪気な、子供の様な面も見せてくる。掴み所のない人間性に、抱く感情も複雑化してくる。

殺してやりたいと思つた。怒りに身を任せて思い切り顔を打ってしまった。それくらい憎悪を抱いていたはずだ。それなのに、何故か雨宮を無視することが出来ない。

「…泉くん、どうしたの？ 黙りこくつちやつて。ていうかさ、もう授業始まつちやつてるよ。遅刻だけど一応出席はしとこうよ」

そういつて俺の手を引く雨宮。雨宮に連れられるまま、俺は出ないつもりだった授業の教室へと向かつた。

誰も居ない廊下を二人で歩く。

教室へ着くと生徒は皆席に着いており、教授が教卓の上で講義をしている最中だった。その中に二人でこっそり入り、扉付近の一番後ろの席へ並んで座った。ふと、別の列の前方の席に遙ちゃんが座っているのを見つけた。先週まで二人で並んで座っていたはずなのに、今日の席はあまりにも遠く、関係性の決裂をひどく痛感した。

横に目をやると、雨宮もこちらを見ており、目があうとニヤリと笑つた。

◆

「ねえ、なんでさつき帰ろうとしてたの？」

授業が終わるや否や、雨宮が俺に問いかける。

「…体調、悪かったから…」

「そうなの？ 今は大丈夫？」

「…うん…」

帰ろうとしていたのは、昨日の遙ちゃんと同宮のことで気まづくなり、行きにくさを感じていたからだ。なのに何故こいつは、昨日の事など何もなかったかのように、こんなに平然としているのだろうか。

ふと前方を見ると、遙ちゃんが友達と教室を後にする姿が目に入ってきた。ついつい目で後を追いかけてしまう。昨日まで何気なく会話していたはずなのに、こんな形になるとは思ってもいなかった。

すると、目の前にコートを羽織った身体が立ち塞がった。顔を上げると、俺の頭を見下ろす雨宮の顔が目に入ってきた。

「遙ちゃんのこと気になる？」

俺のことを見下ろした状態で、雨宮が話しかける。

「…は？」

「だって今日一緒に授業受けてないし。もしかして拒絶されちゃった？」

「いや、元はと言えばお前が…！」

「じゃあさ、今度から僕と二人で授業受けようよ」

「…え？」

「そんでき、昼ご飯とかも一緒に食べようよ。放課後とかも一緒に帰ったりとか。都合良ければでいいんだけど」

「あ、えつと」

「だってさ、友達だから。いいよね？」

「……」

「じゃあ、またね」

俺に有無を言わず、雨宮は立ち去っていった。肯定も否定もできず、半ば強引に大学生活を共に過ごすことになった。普通なら友人と共に学校生活を謳歌するのは悪いことではないはずなのに、やはり引つ掛かりを感じる。

雨宮のせいで、今まで仲良くしていた遙ちゃんと関われなくなってしまった。

雨宮のしたことが許せないはずなのに、それでも雨宮と絶交してしまうのはどうしても気が引けた。雨宮からの好意を無下にするのは悪いと思っっているのか。それとも、独りになってしまふことを恐れているのか。

次の授業を受けている最中にも、あの二人のことが頭からずつと離れなかった。